蘇るリットン・ストレイチー（2）

――帝国・冒険・玉砕・セクシュアリティ――

中原章雄

本稿を書き継いでいるうちに痛感したのは、ゴードン伝がその前に置かれているナイティンゲール伝とかかわらせて論ずることの重要さである。この点については、本稿では、あとで簡単に再度言及するにとどめて、もう一つ感じたことを記しておきたい。

それは、ストレイチーの凝縮された文体の含蓄の豊かさである。マイケル・ホルロイドのストレイチー伝は、うたがいもなくストレイチー批評史・研究史に燦然と輝いているし、改訂版が出たことによって、さらに高く屹立しているように思われる。

この伝記は、ブルームズベリ・グループという人間関係の金鉱を実証的に博捜した見事な成果の集積である。二〇世紀後半に至って可能になった性的な問題に関しての寛容な空気を、じゅうぶんに利用しえたことは、この伝記の大きな特徴であろう。

しかしながら、ストレイチーの性生活の秘められていた面が無視できないにせよ、「ベッドとベッド・ルームをも隈無く探索する」[10]ことによって得られた結果を過大視することは危険であろう。

伝記における、こうした面の過大視に関連して、わたしが想起するのは、ジェイムズ・ボズウェルのことである。戦後間もなく、若い日の彼の生活を綴った『ロンドン日記』は、新たに発見された、いわゆる「ボズウェル文書」の重要な部分であることも作用して、この種の文献としては異例のベストセラーになった。

しかし、それ以上に『ロンドン日記』をベストセラーに押し上げたのは、そこに一八世紀の青年の性生活が赤裸々に描かれていたからであった。ひとびとには戦後の解放的な時代のなかで、少なくとも、そのように読まれたようである（発見当時の『ニューヨーク・タイムズ』は一ページ全部をこの日記の物語に充てている）[11]。

けれども、『ロンドン日記』の一面に関するセンセーショナルな扱いは、ボズウェルという誤解されやすい人物とその仕事にさらに大きな誤解を持ち込むことになったのではなかろうか。彼が精力的な人物で、それを日記において誇示する傾向があったことは否定する必要がない。問題なのは、そのことが彼が一八世紀の文学において行った寄与の全体を見えなくしかねないことである。

じっさい、『ロンドン日記』以後、ボズウェルの日記に対する関心は一般には急速に萎んでしまった。ストレイチーの問題も、それほど異質ではないであろう。

五　ゴードンと政治家たち

オクスフォードの「世界の古典叢書」版のテクストで七〇ページあまりを占めるゴードン伝は、一応、四節に区分できるであろう（以下、主な引用のあとに、このテクストのページを括弧に入れて記す）。

最初の二〇ページ足らずがスーダンにおけるマーディの反乱に至るまでのゴードンの経歴、つぎの第二節に相当する約一〇ページは、この反乱の経過、そして、イギリス政府が度重なる対応の不手際の末に、それまで奇人視されがちであったゴードンの派遣を決定するまでの経緯。

第三節の二〇ページ強は、派遣決定後も政府の混乱が続くことを述べる。エジプト総領事サー・イーヴリン・ベアリングはゴードンにスーダン撤退を指示しようとしながら、政府部内に反乱の鎮圧を主張する強力な「帝国主義派」があって政策の対立が十分に解消されないまま、ゴードンは現地に到着することになる。

そこには、撤退を指向しながら好戦的なゴードンに任務を委ねるという、最初から存在した人選と政策の齟齬、さらに、この時代に急速に影響力をもち始めたマスメディアのゴードン贔屓（それだけ彼は民衆の英雄であったわけだが）がからんで混乱は増幅される様子が活写される。

最後の第四節になる約二〇ページは、「真の包囲戦はこの瞬間から始まった」という文からゴードンの戦死とその後を記述する最後までである。この点については後で述べる。

以上のような概略からも大凡うかがわれるであろうように、ストレイチーは、孤立無援のうちに壮烈な最期を遂げるまでのゴードンを主役として扱いながらも、危機に際して、いささかの右顧左眄もすることのない主役と、その背後でしきりに右往左往する政治家たちの姿を、見事に描き分けている。政治家たちは、それぞれ政治的立場は異なるのだが、結果的には、ゴードンの孤立を際立たせてしまうのである。

なかでも、とりわけ印象的なのが、ゴードンがアフリカに向かって立つときの、ロンドンのヴィクトリア駅の場面である。

夜八時、ヴィクトリア駅に年配の紳士数人が集まっていた。ゴードンは彼の副官として勤務する予定のスチュアート大佐を従えて、プラットフォームに軽快な足取りで現れた。グランヴィル卿が必要な切符を買い、ケンブリッジ公爵が客車のドアを開けた。将軍は飛び乗った。そこへウルズリ卿が革カバンを持って姿を現した。カバンには旅中の用意にと間際になって友人の間で集められた二〇〇ポンドが入っていた。カバンは窓から手渡され、列車は発車した。ゴードンは車窓から身を乗り出して、最後の質問をウルズリ卿に囁いた。大丈夫だ。あれはすんだ。卿自身が責任をもって請け合うから。翌朝、閣僚全員がサミュエル・クラークの『聖書の契り』を手にするだろう。それで安心だ。列車は駅から出て行った。（二〇五―六）

目前の任務については互いに一言も語られず、ゴードンは神秘主義者の古典的著作が閣僚たちに手渡されることをのみ気にかけている。無限の心理的距離が、国家の重大な任務を担う者と委ねた者たちとを隔てているという驚愕すべき現実。ヴィクトリア駅に佇む数人の英国紳士という、一見したところ平凡きわまりない風景が秘めている絶望的な現実を、ストレイチーは見事にスケッチしている。

この現実を抱えたまま、ゴードンはイスラム教徒の熱狂が渦巻く北アフリカに向かうことになる。

六　最期までの日々

二月中旬、ゴードンはスーダンの首都ハルツームに着任する。ハルツームの名は、象の身体を意味するアラビア語に由来するという。白ナイル川と青ナイル川との合流点に位置し、河川交通の基地である。一九世紀初頭にエジプトのムハンマド＝アリが建設して以来、エジプトへの奴

隷輸出の基地でもあった。スーダンは世界有数の暑熱の地だが、そのなかでもハルツームはとりわけ高温の都市といわれる。

ゴードンは以後その死まで一年足らずの間この地に踏みとどまることになる。しかしながら、ストレイチー自身はこの地の地理的条件には全く触れていない。このゴードン伝は、すでに述べたように、主人公が中東を放浪する場面から始まるのだが、クリミヤに始まってアフリカ、中国、またアフリカと、大英帝国の辺境を渡り歩く軍人・冒険家を描いたにもかかわらず、きわめて空間の描写に乏しい。

ゴードンはここで孤立無援のまま死を迎えるのだが、どのような場合でも、植民地の辺境と本国政府の間には、空間的にみても意志疎通に多大の困難が存在するであろう。ところがゴードンの場合には、彼の任務自体に最初から曖昧さがあり、しかも、本国政府との間にカイロの総領事サー・ベアリングが介在していて、明らかに問題を一層困難にしていたのであった。

しかしながら、ストレイチーは、ハルツーム、カイロ、ロンドンという三地点間の広大な地理的・空間的距離はほとんど問題にしていない。あたかも、政治家たちとゴードンは、それぞれ首都の近接した省庁の建物に陣取っていて、政策を論じ、対立しているかのように描かれるのである。こうして、それだけゴードンの孤独と孤立のみが浮き彫りにされることになる。

政府の方針とゴードンの任務の曖昧さが、敏活な対応を遅らせているうちに、マーディの側は勢力を増し、ゴードンにとって状況は一層危機的になる。

イギリス政府の現地の情勢判断に関する甘さは、絶望的であった。ゴードン派遣以前からの混乱は、この期にいたっても好転しない。ストレイチーは、ここでもサー・ベアリングの優柔不断の態度を強調している。

一方、首相グラッドストーンの態度は硬直していた。最初からスーダン撤退を主張していた彼が、現地の情勢の推移と緊迫をまったく理解しようとしない頑なな姿を、ストレイチーは数ページを費やして述べている（二一三―七）。

現存するゴードンの日記は、この追い詰められたゴードンの籠城の日々を綴っている。わたしが見ることができたのは一八八五年版であるが、七〇ページほどのH・W・ゴードンの序文が付いて、九月一〇日から一二月一四日までをカヴァーする四〇〇ページあまりの日記本文とさらに一〇〇ページほどを占めるさまざまな書簡類の「アペンディクス」から成る相当詳細なものである。[12] たとえば、九月二四日の日記は、ハルツームの守備体制の略図などを含む四〇〇〇語ほどにも達する詳しいものである。しかも、この日が特に詳しいわけではない。

ストレイチーは日記からの適切な引用を交えながら、ゴードンの孤立した、しかし平常心を失わない日々の生活を描いている。特徴的なことは、しばしばストレイチーの揶揄の対象となる、奇矯な信仰と奇癖の持ち主としてのゴードンは、日記に関するかぎり、あまり見られないことである。危機的で、しかも孤立無援の状況に冷静に対処しようとする軍人の籠城日記といってよいであろう。

「もし一〇日以内に援軍が来なければ、街は落ちるだろう」とゴードンは最後の日記を船に託する前日の一二月一三日の日記に書く。だが、結局、援軍は姿を見せず、一月二八日になって彼らが到着したとき、陥落して廃墟と化した町を目にすることになった。

守備隊がほとんど全滅したハルトゥームの状況の詳細についてわれわれは知ることができない。ストレイチーはゴードンの最期の姿として、二つの説を紹介している。一つは、宮殿になだれ込んだ攻撃軍にたいし、

ゴードンは「侮蔑に満ちた威厳ある態度で無抵抗のまま切り殺された」とするが、もう一説によれば、「拳銃を弾丸の続く限り撃ちまくったあげく、剣をふるって戦い討ち死にした」のであった。どちらにせよ、重要で間違いのないことは、彼が「神が許したまうなら、けっして捕虜になることはない」と以前から述べていた信念に忠実であったことなのだ。

七　「ゴードン将軍の最期」の最後

一三年後にイギリス軍によってゴードンの復讐戦が戦われ失地回復がなされ、ゴードン追悼式が行われたことを述べたあとで、ストレイチーは、ゴードンは「恐らく遥かな涅槃の境で幻の聖書のページを繰りながら皮肉を飛ばしていた」としてもおかしくない、と書いている。[13]

そして最後に、「とにかく、万事がめでたく終わったのであった。輝かしい殺戮戦において二万人のアラブ人が殺され、大英帝国は厖大な領土を新たに獲得し、サー・イヴリン・ベアリングは爵位へと一歩近づいたのだから」と締めくくられる。

この結末は、最後に諷刺の刃を、死者ゴードンにではなく、サー・ベアリングに向けていて、そこにストレイチーの意図のかなりの重みがかけられているかのように読める。死をもって栄光を達成したゴードンと、みずからは安全圏に身を置いて対応の遅れからゴードンを見殺しにしたにもかかわらず、栄達への道を歩んだ政治家とを辛辣に対比して締めくくったように見える。じっさい、ストレイチーの筆がベアリングに不公平だというかなり強烈な批判は、この部分が強く影響したものであろう。[14]

しかしながら、むしろわれわれは、以上二つの引用に挟まれた、さりげない一節にこそ注目する必要があるのではなかろうか。

四

But Gordon had always been a contradictious person–even a little off his head, perhaps, though a hero.

ゴードンは、少し頭がおかしかったかもしれない、英雄ではあったが、というのである。二種の和訳では、堀大司訳は「ちと頭がどうかしてゐたのかもしれない」、日高直矢訳は「ちとあたまがへんであったのだ」（傍点は日高）となっている。意味は、もちろん何れでもよいが、問題は文体である。

ここでストレイチーは突如それまでのブルームズベリ派の典雅な文体をかなぐり捨てている。この“off one's head”は*OED*によれば、一九世紀なかごろに初めて現れる口語あるいは俗語的成句である。彼がゴードン論を締めくくろうとする決定的な箇所であえて使ったこの言葉は、おそらくストレイチーの言語感覚からすれば、卑俗な表現であるだけでなく、未だかなり新奇なイディオムであったろう。和訳すれば「少しいかれていた」とでも訳すべきところであろう。

「いかれていた、英雄ではあったけれども」とは、どういうことを意味するのか。ゴードンが大英帝国の軍人として、二度、三度と何人もなしえなかった輝かしい功績を挙げた英雄であったこと、この事実自体はだれも否定できない。だが、ゴードンは「恐らく、いかれていた」からこそ帝国の英雄となりえたのだ、とストレイチーは云いたかったのではなかろうか。

この非ブルームズベリ的な言葉の効果は、もう一つの対照的な言葉によって倍加される。さきほどの「涅槃（Nirvana）」である。「チャイニーズ・ゴードン」に「涅槃」がふさわしいかどうかをここで問う必要は、

おそらくない。涅槃の境地の高みから、俗界の名誉に狂奔するイギリスの政治家たちを見つめているゴードンは、おそらく、伝統的な英語に抑圧されているロンドンの知的エリートを、冷ややかに横目で見ているストレイチーでもあろう。

おわりに

ゴードンの死後を述べる伝記の結末は、このように意外に多義的であるように見える。

いまや「涅槃」の境地にいるゴードンにたいし、対比させられているのは俗界の昇進に狂奔するイギリスの政治家たちであった。彼らを代表する者として、最後に槍玉に挙げられて入るのは、サー・イーヴリン・ベアリングである。ここに記されているように、彼は間もなく男爵に、さらにそののち子爵となり、クローマー卿と呼ばれることになる。

ゴードンの非業の死にかかわりのあった政治家たちのなかで、サー・イーヴリン・ベアリング、のちのクローマー卿のみが最後に責任を問われる形になっていることについては、伝記の忠実な読者は、一応納得するであろう。けれども、ストレイチーによるサー・イーヴリンの処遇を「不当」あるいは「冷酷」とする根強い批判がある。

それは、サー・イヴリンがストレイチーの父の親友であったこと以上に、幸か不幸か、彼が鬼籍に入ったのが、『ヴィクトリア朝の偉人たち』が出版される前年の一九一七年であったからであろう。

しかしながら、だからこそ『ヴィクトリア朝の偉人たち』は、たんにヴィクトリア朝一般、あるいはヴィクトリア朝人一般への観念的な反逆ではなく、ストレイチーの捨て身の反逆であったといえるであろう。

『ヴィクトリア朝の偉人たち』はまた、意外な副産物を内包している。フロレンス・ナイティンゲールの強力な味方はヴィクトリア女王であった。孤立無援のゴードンを最も気遣ったのも、ヴィクトリア女王であった。ストレイチーはそのことを二人の伝記の中で忘れ難く言及している。ストレイチーの次の著作の構想は、すでにかなり進んでいたのであろう。だが、われわれはゴードン自身に帰らねばならない。

ハルツームの悲劇ののち、巷ではつぎのような歌が流行ったという。

Too late! Too late to save him,
In vain, in vain they tried.
His life was England's glory,
His death was England's pride.[15]

舌足らずにも響く俗謡だが、ゴードンがこうした民衆的言語で謳われるほど、「イングランドの栄光」として生き、「イングランドの誇り」として死んだことは伝わってくる。それ程までに彼は国民的英雄として惜しまれ、軍神となったのである。

しかしながら、ストレイチーは、シェイクスピア的なタッチでその民衆の移り気を示唆している。首相グラッドストーンに一斉に人殺しと罵声を浴びせた民衆は、舌の根も乾かぬうちに、そのグラッドストーンに導かれて、今度はロシア問題の方に目を奪われてしまうのである。

以上見てきたように、卓越したヴィクトリア朝人、そして国民的英雄ジョージ・ゴードン将軍を見つめるストレイチーの眼差しは、意外に複雑である。それは、並の諷刺家が武器とする比較的単純な辛辣さとは異なっている。

ストレイチーの眼差しは、ゴードン自身の生と死を曇ることなく見つめただけでなく、その鋭く広い視野のうちに、ゴードンの死にかかわる

大英帝国の実態を収め、さらにその帝国のなかで今や不気味な蠕動をはじめたマスメディアの存在を、さらに、それに躍らされる民衆の姿をも把握するのである。

［付記］

本稿を夏休み中に何とか書き上げ提出したので、ゲラ刷りが来る間に、ブリティッシュ・ライブラリでフォリオ判四冊に製本されたストレイチーの清書原稿を読むことができた。それについては「世界の古典叢書」の巻頭の解説で編者ジョン・サザランドが特にＢＭの書架番号を記し言及していたので、以来ぜひ一見したいと思っていた。

もとより、この「付記」で限られた時間内に読み取り得たことをも記すことはできないが、本稿の対象である「ゴードン伝」について少なくとも述べておきたいことは、その原稿が、至るところに彫琢の跡をとどめつつも、概して伸びやかな筆致で書かれ、全体として極めて読みやすい、きれいな文書に仕上がっている事実である。

ところが、ゴードンの死とその後の経過を述べた最後の数ページに至ると、清書原稿においても明らかになお補綴の跡が顕著になり、著者のなみなみならぬ苦心を示している。

もう一つ付け加えるならば、本稿で言及した夜のヴィクトリア駅の場面もまた、ストレイチーの推敲が目立つ。別の機会に、彼の文体へのこだわりを例示したいと思っている。

注

① 注⑥参照。

② Michael Holroyd, *Lytton Strachey: The New Biography*（London, 1995), 420.

③ たとえば、つぎのような最近の伝記論集など参照。
John Batchelor, ed. *The Art of Literary Biography*. Oxfofd, 1995.
Mark Bostridge, ed. *Lives for Sale*. London, 2004.
後者については、筆者は『立命館英米文学』第一五号（二〇〇四年）に書評を寄稿している。

④ 正確には、堀大司訳は『ゴードン将軍の最期』、日高直矢訳は『ヴィクトリア朝時代の秀れた人々』。

⑤ この箇所の引用については、とくに定評ある堀大司訳を参考にした。

⑥ この引用についても⑤と同じ。ただし、ゴードン伝の結末の部分の訳に関しては、本稿の「おわりに」を参照。

⑦ 世界の古典叢書一七九ページへの注参照。

⑧ 以下の記述については、主としてホルロイドの伝記によっている。

⑨ 同右。

⑩ 新しいオクスフォード大学版英文学史第一二巻の、最近の伝記研究の傾向を論じた第一七章参照。

⑪ 「ボズウェル文書」については、拙著『辞書のジョンソンの成立』参照。

⑫ General Gordon. *Khartoum Journals*. London, 1885.

⑬ 以下の部分の分析は、上掲のテクストの二四二―三ページについてである。

⑭ この点については、「決定版」の *Eminent Victorians*（Lomdon, 2002）に収録されているジョン・ポロックの解説（Afterword）参照。

⑮ John Ferns, *Lytton Strachey*（Boston, 1988), 68.

（本学文学部名誉教授）